

テーマ「南能登地区における読書指導の取り組み ～七尾高校の実践を中心に～」

石川県立七尾高等学校 教諭 枘田真里
石川県立鹿西高等学校 教諭 木全理恵

1 はじめに

南能登地区における読書指導、敷衍して論理的思考力およびコミュニケーション能力育成のための諸活動について、七尾高校の取り組みを中心に紹介する。七尾高校は2022年、全国で8校のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）第V期「先導的改革型」校のひとつに指定され、能登の基幹校として生徒の論理的思考力、創造性、獨創性、科学的探究力、表現力、国際的な場面で討議できる英語活用能力の養成・カリキュラムおよび指導法の開発を行っている。文理の枠を超えた探究活動「融合プロジェクト」を推し進めることで、学際的協働を主導するファシリテーターを育成するという責務を負っており、教務課図書係を中心として企画運営される読書指導も、これらの教育活動と有機的に連携した取り組みが目指される。学校図書館の蔵書数は約37,231冊、別にSSH推進室の蔵書として、各分野の専門書から論文執筆および発表の手引書まで、大学の研究発表のレベルに堪えうる書籍が多数揃っており、学校図書館の平均蔵書数25,813冊（2021年度・全国学校図書館協議会調べ）と比較しても、その充実ぶりがうかがえる。

2 実践の概要

（1）探究活動における図書の活用

七尾高校の探究活動はSSHの開発した手法を普通科にまで広げた全校体制が敷かれ、学年に応じた活動が設定される。特に1年次「知の探究基礎」においては、探究活動に必要な基礎的スキルを身に付けるための授業が展開されるが、テクニカルライティング、文献調査、ディベートといった活動の中で図書館が活発に利用され、図書資料の探し方、資料の引用の仕方、参考文献の記入の仕方、発表の手法など、探究活動の土台を学ぶ。

（2）朝読書（読書週間）

朝読書については南能登地区11校のうち、毎日行っている学校が複数ある。七尾高校でも年に2回読書週間を設け、朝の時間を活用して実施し

ている。担任、副担任も自分の読みたい本を持参の上で参加し、学校全体での読書に対する意識高揚を図っている。図書の選定にあたっては、学年に応じて新書を指定する等、普段手に取ることの少ない本に接する機会を設けている。新書については岩波書店、講談社の新刊など、年間約160冊の新書新刊が書架に加わるが、これは他校に例を見ない特徴といえる。読書週間の締めくくりとして一言感想やブックレビューを書くが、新書のレビューは南能登地区でも珍しい取り組みで、内容も大変読み応えがある。

（3）青春の読書

平成14年から20年間、『青春の読書』と題した小冊子を全校生徒に配付している。全職員が、自らが青春時代に親しんだ本や感銘を受けた本、現在関心を持っている事柄についての本を一冊選定し、紹介文とともに掲載している。身近な先生の読む本に生徒は高い関心を示し、「〇〇先生の紹介した本を貸してください」と図書館に訪れる生徒も多い。また、自身で購入した書籍を教室に置く担任もあり、あたかも個性豊かな「ミニ図書館」の様相である。

（4）企画展

1911年『善の研究』の各編を発表した哲学者である西田幾多郎は七尾ゆかりの人物である。文化祭や、命日である6月7日には「寸心忌」と書かれたポップが目を引く企画展が行われ、「人格の実現」を目指す若者の思索のひとつを保障している。最近では七尾高校の校舎を舞台にしたオジロマコト氏の漫画『君は放課後インソムニア』の特設コーナーが目を引く。不眠で悩む高校生ふたりが織りなす青春ストーリーで、七尾高校の校舎がそっくりそのまま描かれた漫画の誌面や色紙などが展示され、生徒の人気を博している。

（5）『図書館報』の発行

『図書館報』は1952年の創刊から令和4年3月号で160号を数える。読書感想文や読書感

自我の確立は他者とのコミュニケーションを除いて成立しない。漠然と存在する、自分という心の塊は、他人との、時に痛みを伴うやり取りを介し形作られていく。しかし今、若者たちからは本音を語らず、摩擦を減らして生きていきたいという思いが見て取れる。それでは強靱な自己は育たない。また、他人に合わせるという行動の動機が、人との摩擦を減らしたいということのみに留まれば、他者の考えがどのような道筋で成り立っているか、その文脈も関係ない。本を読むことは、他人の思考の文脈を辿る作業であり、齋藤孝氏曰く「思考停止せず、他者をどんどん受け入れていく柔軟かさ」を身につける営みだ。思考停止の動機は他者への恐れであり、読書はその恐れを軽減し得る。必要な時に傍に寄り添い、知の喜びを与える本は「理想の友」と言うこともできるだろう。本の中の登場人物は、実際の血は通っていないけれど、LINEのメッセージを1日100件打つ友達よりも様々なことを教えてくれる、落ち着いた友人である。図書室が、生徒の知を育み生を彩る場所となるよう、更なる実践を積んでいく所存である。